

都道17号線道路補修および歩道設置 工事に伴なう発掘調査報告

1978年3月

東京都北多摩北部建設事務所
武藏国分寺遺跡調査会

目 次

I. 調査に至る経過	3
II. 調査地区的概観	3
III. 層序	5
IV. 調査経過	6
V. 発見遺構	8
VI. 出土遺物	15
VII. 小結	17

図 面 目 次

第1図 調査地区の位置	4
第2図 基本層序 ($1/20$)	6
第3図 第23次調査遺構配置図	7
第4図 S I 32・115～118住居跡実測図	11
第5図 SD 7・12・13・28～31溝跡実測図	13
第6図 SK 140～143土壤実測図	14
第7図 S I 115 住居跡出土遺物	18
第8図 S I 115 住居跡出土遺物	19
第9図 S I 115 住居跡出土遺物	20
第10図 S I 115 住居跡出土遺物	21
第11図 S I 117 住居跡・SD 31溝跡出土遺物	22
第12図 S I 117 住居跡出土遺物	23

図 版 目 次

第1図版 遺構	1. 調査風景	2. 調査風景(夜間)
	3. S I 32 住居跡	4. S I 117 住居跡
	5. S I 115 住居跡	6. S I 115・116・118 住居跡
第2図版 遺構	1. SD 7 溝跡	2. SD 13 溝跡

- | | | |
|---------|----------------|----------------|
| | 3. SD 12 溝跡 | 4. SD 12 溝跡 |
| | 5. SD 28・29 溝跡 | 6. SD 28・29 溝跡 |
| 第3図版 遺構 | 1. SD 30 溝跡 | 2. SD 31 溝跡 |
| | 3. SK 140 土壙 | 4. SK 141 土壙 |
| | 5. SK 142 土壙 | 6. SK 143 土壙 |
- 第4図版 出土遺物
- 第5図版 出土遺物

I. 調査に至る経過

昭和51年4月17日、東京都北多摩北部建設事務所より都道17号線（府中街道）の舗装打替ならびに歩道設置工事に伴なう埋蔵文化財の調査について、東京都教育庁文化課に照会があった。この都道17号線下については、昭和49年度に道路東側部分について実施した東京都水道局の水道本管埋設工事に伴なう緊急調査において、既に多数の住居跡、溝跡を検出しており、良好な状態で遺構が保存されていることが判明していた。従って、該道路西側においても同様な状況と判断されるので、国分寺市教育委員会と協議の上、調査実施の方向で協議を進めた。

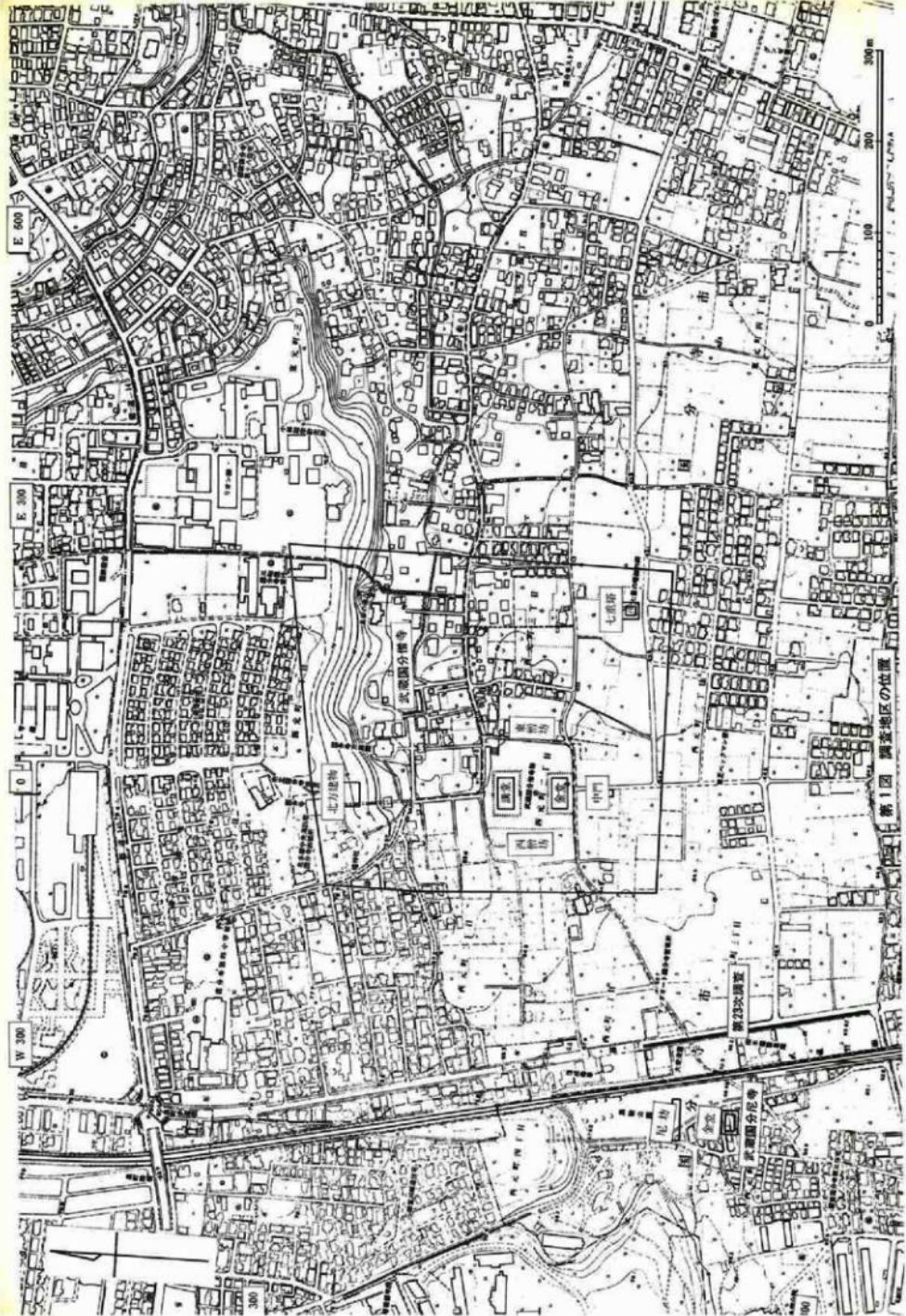
この結果、道路舗装はすでに調査済の東側部分を全面打替、西側部分については在来路盤を乱さない範囲での打替に設計変更することになった。また、歩道設置部分については、直接遺構面への影響はないものの、道路雨水を処理するために排水管を埋設することから、この排水管埋設部分に試掘調査を実施し、遺構の分布を把握した上で本調査を実施することで協議が成立した。なお、本調査にあたっては、可能な範囲で遺構全体を調査することとなり、この中に車道部分も含まれているため、警視庁交通規制課とも協議を行なったが、都道17号線が主要幹線道路で交通量の多いこと、他に迂回路がないこと等の理由で、上下二車線の確保が出来なければ昼間の調査は認められないとのことであった。従って、已むを得ず車道部分の調査は夜間に実施するという極めて変則的な方法で本調査を実施することにした。

調査は、武藏国分寺遺跡調査会が東京都北多摩北部建設事務所の委託をうけて、昭和51年10月1日～22日に試掘調査を、これと一部併行しながら昭和51年10月7日～12月17日まで本調査を実施した。

II. 調査地区の概観

多摩川沿いの武藏野面と立川面との境には、国分寺崖線と呼ばれる段丘崖が見られる。当崖は、武藏村山市残堀付近を起点に、太田区丸子橋付近まで確認されている。起点では武藏野面・立川面との比高差が殆んど認められず、西方に順じて緩傾斜面から急崖へと変化し、終点では22mの比高を有する。本次調査地区付近では、位置的に起点よりであり、比高差は14m程度である。一方、本次調査地区付近の崖線沿いには、「黒鐘谷」と呼ばれる深い谷が存在する。谷が埋没した後に、奈良・平安時代と考えられる住居が営まれていたという事実（第2次調査による）からして、当時の地形的景観を考える場合、この「黒鐘谷」の存在はさして問題にならない。むしろ、谷の埋没土上面（遺構確認面）の状況こそ問題となる。

第1図 調査地区の位置



ところで、原地形は本次調査ならびに第2次調査において断続的ではあるが確認されている（崖付近から南に500m程の範囲）。南より国分寺市・府中市との市境付近で標高66m、緩傾斜面を形成しながら、北にいくにつれ若干標高を高くする（66.5m）。また、国分僧・尼寺の中間地点で66.5mと逆に低くなるが、この付近は概して平坦であり、SI 115～118・SD7と遺構が集中的に検出された地域である（第2次調査でも同様に多くの検出例がある）。さらに、北に向けて高度を下げながら100m程で「黒鐘谷」の南岸にさしかかる。「黒鐘谷」に堆積した黒色土上面は平坦であり（標高64～64.5m）、先の平坦地域と同様に、ここでも遺構、特に住居跡（8軒）が集中して検出されている。以上のことから調査地区内の立川面では、原地形と遺構の検出状況において次のことを知り得る。盛土・切土によって現地形は、一様な緩傾斜面に造成されているが、原地形もそれとはほぼ同様な傾斜をもち、断続的な平坦面の広がりが認められる。その平坦面に限って遺構が集中して検出される傾向にある。

本次調査地区は、東京都国分寺市西元町3丁目地内に位置し、都道17号線（通称府中街道一所沢方面より、武藏国分僧・尼寺の中間地域を通って、府中市へ入る幹線道路）の西側、つまり、地目は道路である。（第1図）

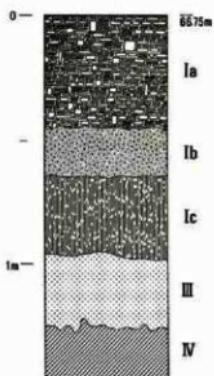
この地域は、昭和48年から継続調査を実施している国分寺市立第四中学校地内において、多数の住居跡・掘立柱建物跡・土壙・溝跡等が検出されており、また、滝口宏により推定されている僧寺と尼寺を含めた「寺地」の中に含まれる。さらに昭和49年度に実施した該道路の東側（都水道局）の調査（第2次調査）においても多数の住居跡・溝跡・土壙等を検出している。従い、この地域での各遺構の性格・時期・分布を知ることは、武藏国分二寺跡の設置された状況および変遷を知る上で重要な部分を占めるものと考えられる。

III. 層序

第I a層	路床	道路の舗装。路盤をも含む。厚さ約40cm。
第I b層	盛土	黒褐色を呈し、ロームブロックを多量に含む。道路建設の際の盛土である。調査地区的南側（SD11・SK140付近）には認められず、北側（SD7・SI115付近）に認められた。厚さ約20cm。
第I c層	表土	いわゆる耕作土である。褐色を呈し、道路下のため、堅くしまる。
第III層	茶褐色土	ローム漸移層。粘性を帯び、第IV層との境は不明瞭である。調査地区的南側では、すでに耕作により削平されており、北側のみ認められる。
第IV層	黄褐色ローム	第III層との境付近は約10～20cmの厚さで柔かいが（ソフトロ

ーム)、下層は堅くしまる(ハードローム)。従来、この両者は区別されてきたが、ここでは上層は下層のソフト化現象としてとらえ、区別していない。

以上が基本層序であるが、本調査地区では、本来武藏国分寺周辺にみられる第Ⅱ層の黒褐色土が全く認められない。これは、この付近での耕作が深くおよんでいることから、すでに表土に取りこまれたためと考えられる。また、ローム面を基準として観察すると、SD 28からSK 140に向って漸次高くなり(標高 66.1~66.4 m)、途中掘り山のため不明であるが、SD 7~SI 118付近では再び低くなり(標高 65.6 m)、漸次、国分寺崖線下の黒鐘谷へ向って傾斜するものと思われる。従って、この付近の立川面は、現地形でみると平坦にみえるが、かなり起伏に富んでいるようである。(第2図)



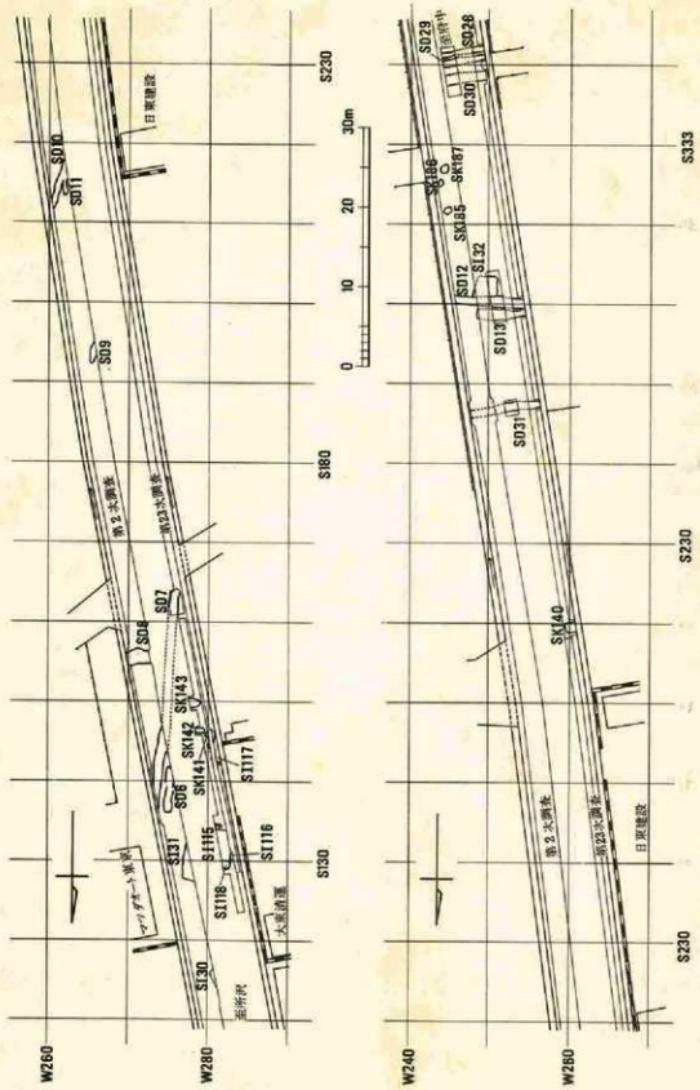
第2図 基本層序(1/20)

IV. 調査経過

調査地区が幹線道路上のため、調査日程は、保安上の問題で工事の進行にあわせて設定することとし、このため調査は断続的に実施することとなった。(第3図)

試掘調査は昭和51年10月1日から実施し、都道17号線の南側(府中・国分寺市境)より順次北に向って実施した。この結果、同日、SD 12・13・28~31溝跡を検出し、調査地区的東側は、約50~60cm幅で電タケーブルが全線にわたって埋設されていることがわかった。同月4日には、SK 140 土壌を検出したが、これより北は上下水道の掘り山にあたり、すでに造構面は残っていないかった。また、この状況はSD 7溝跡の南側まで続く。同月21・22日にいたり、一部上水道の掘り山によって切られているが、SI 115~118住居跡・SD 7溝跡・SK 141~143土壌を検出し、試掘調査を終了した。また、この間に本調査(造構調査)について協議を行ない、一部試掘調査と並行して実施することとなった。

本調査は昭和51年10月7日から実施し、同日、SD 12・13・31溝跡ならびにSK 140土壌の調査を、翌8日にSD 28~30溝跡の調査を実施した。これらの溝は、後日、車道部分についても調査を実施することとし、警視庁交通規制課との協議の結果、調査は夜間に行なうこととなつた。



第3圖 第23次調查地構配置圖

同月23日には、SD7溝跡およびSK141～143土壤、同25～27日にSI115～118住居跡の調査を実施し、28日には、実測基準点のトラバース測量を行ない、一応屋間における調査を終了した。

その後、工事施行との関係で調査を中断し、同年12月13・14日になって、先述したSD12・13・28～31溝跡の車道部分の調査を夜間に実施し、新たにSI32住居跡を検出、調査し、同月17日に夜間調査部分の実測基準点のトラバース測量を行ない、全調査を終了した。

V. 発見遺構

(1) 住居跡

SI32住居跡（第4図、第1図版3）

中軸線より南312m、西250mに位置する。昭和49年度に実施した第2次調査に於いて、すでに確認されており、北側でSD12溝跡と重複するが、SI32の方が古い。南北2.5m以上、東西約2.5m程のほぼ方形を呈する。西壁の一部に周溝が認められ、北側に2ヶのピットを有する。床面は、ローム層中にあり、堅くしまっていた。

住居跡の堆積土は、褐色系の土が入っており、南壁付近では焼土と木炭の層が一部認められた。

遺物は、瓦・須恵器杯の破片が若干出土している。須恵器杯は、いずれも底部に回転糸切り痕をそのまま残すものである。

SI115・116・118住居跡（第4図、第1図版5・6）

中軸線より南132m、西282mの位置で検出した。SI115・116・118ともに重複しており、SI115が一番新しい。SI116・118の新旧関係は不明である。いずれも調査範囲が限られていたため、全体は明らかではない。

SI115住居跡は、一部ローム面より確認したが、実際の掘り込み面はローム漸移層である。南北約4.9m、東西1.3m以上の方形ないしは長方形を呈するものと思われ、四壁に周溝がめぐる。床面はローム層中にあり、堅くしまっており、貼り床等の施設は全く認められない。また、床面上から、西壁にそって2ヶのピットを検出した。いずれも床面からの深さ約30cmを測り、柱穴の可能性があるが、全体が明らかではないので断じがたい。

住居内の堆積土は、大きく4層に分けることができる。1・3・4層は茶褐色ないしは灰褐色を呈し、ローム粒・焼土・木炭・灰等を含み、2層は黒褐色を呈し、やはり焼土・木炭・灰

を含んでいる。いずれの層からも瓦の小片が出土しているが、少量である。また、S I 115の北側では、S I 118と重複し、一部S I 118の堆積土が流れ込んでおり、これはS I 115の北壁がS I 118の堆積土中に構築されたため、S I 115が廢棄された際、くずれ落ちたものと考えられる。

遺物は、瓦・土師器・須恵器等が出土しているが、ほとんどが瓦であり、しかも出土位置は床直上が大部分を占める。

S I 116住居跡は、S I 115の西側で周溝と床面の一部を検出した。S I 115よりも古い。床面は、ローム層中にあり、S I 115のものより約15cm高い。詳細は不明。

遺物は全く出土しなかった。

S I 118住居跡は、S I 115の北側で北西隅部を検出した。S I 115よりも古いが、西壁はS I 115のものとはほぼ同位置にある。床面は、S I 115のものより約20cm高く、貼り床が認められる。即ち、住居跡の構築時には、S I 115の床面とほぼ同レベルまでロームを掘り込み、その後、再び灰およびロームブロックを含んだ黄褐色土で埋め、さらに黒褐色土を入れた上で、厚さ約2~4cm程にロームを貼って、床をつくっている。

遺物は全く出土していない。

S I 117住居跡(第4図、第1図版4)

中軸線より西へ281m、南へ144m、S I 115・118住居跡の南側、SK 142土壙に近隣する位置に検出された。東壁と北壁の一部を調査したのみで規模・内容等の詳細は全く不明である。東壁は一部攪乱されているが中軸線にはほぼ平行していると思われ、2.8mを計る。二つのコーナーが検出されており、おそらく隅丸の方形を呈すると考えられる。壁高は一番明瞭な部分で30cmを測る。カマドは東壁中央部に設けられており、住居跡外に60cm程突出している。

住居跡内の堆積土は7つに分層できる。1・2・5・6層は、黒褐色~黒色を示し、赤色スコリア・ローム粒が混入する。色調・混入物の含有率・性状等から区別される。3・4層は床面直上に堆積した土ではあるが、カマドに近隣する断面であることから、ここではカマド内の灰・粘土粒・粘土塊が混入する。色調は黄色~明褐色を示す。7層は貼り床の土であり堅く、下部ほど小粒な土を入れ、しまりも強い。黒色土・ローム粒を混入している。

カマドは砂質粘土によって作出され、平面図のドット部分、つまりカマド袖部にその痕跡が認められる。形態は東壁に直交せず、また焚口部分は床面を5~15cm程掘り込んでいる。この凹部にも焼土が若干混入している。その含有率からしてカマド断面の5層に該当すると思われる。2層は焼土が充満しており、おそらく煙道部はこの延長に続いていると思われるが、上部は押しつぶされ確認はできなかった。なお、袖部近くに平瓦が1点検出されているが、カマ

ドの部分として利用したかは不明である。

遺物の出土状態は全面調査を行なった訳ではないので詳細は定かではないが、次の点は言えそうである。平面的には、カマドに近隣して半完形の平瓦・須恵器・土師器の杯が2個体重なって出土している。層位的には、2・5層に集中しており、2層には完形品が多い。出土遺物は他に、土師器の合付甕・須恵器・土師器の甕の破片が出土している。

(2) 溝跡

SD 7 溝跡（第5図、第2図版1）

中軸線より西へ275.5m、南へ163mに位置し、軸線に平行する南北溝である。南北両端は擾乱を受けている。遺構確認面で上部幅90~120cm、下部60~80cm、該面からの深度は25~50cmを計る。北側より南側、西側より東側が深い。底面は鍋底状を呈し、東側が西側より若干低くなっている。また部分的に幅40cm、深さ20cm程度の凹部を有するがこの規模は知り得ない。遺構内の堆積土は全体に堅く、赤色スコリア（2・3層）・ローム粒（1・2層）を多量に含有する。先の凹部内も同様な土が上部より連続的に充填しており、二段掘りであることが知れる。

出土遺物は、灰陶陶器・須恵器・瓦・繩文土器等の破片、および打製石斧がある。

なお、本溝跡は昭和49年に実施した第2次調査において、既に確認済である。

SD 12 溝跡（第5図、第2図版3・4）

中軸線より南310m、西252mの位置に検出した。軸線に対しS 88°30' E の方向をとる東西溝である。S 1 32 住居跡と重複し、SD 12の方が新しい。本溝は昭和49年度に実施した第2次調査において既に確認されている。上端の最大幅は約1.5m、底面の幅は約30cmを割り、遺構確認面（ローム層）からの深さは約70cmである。

遺物は、回転糸切り痕をそのまま残す須恵器杯および瓦の小破片が出土している。

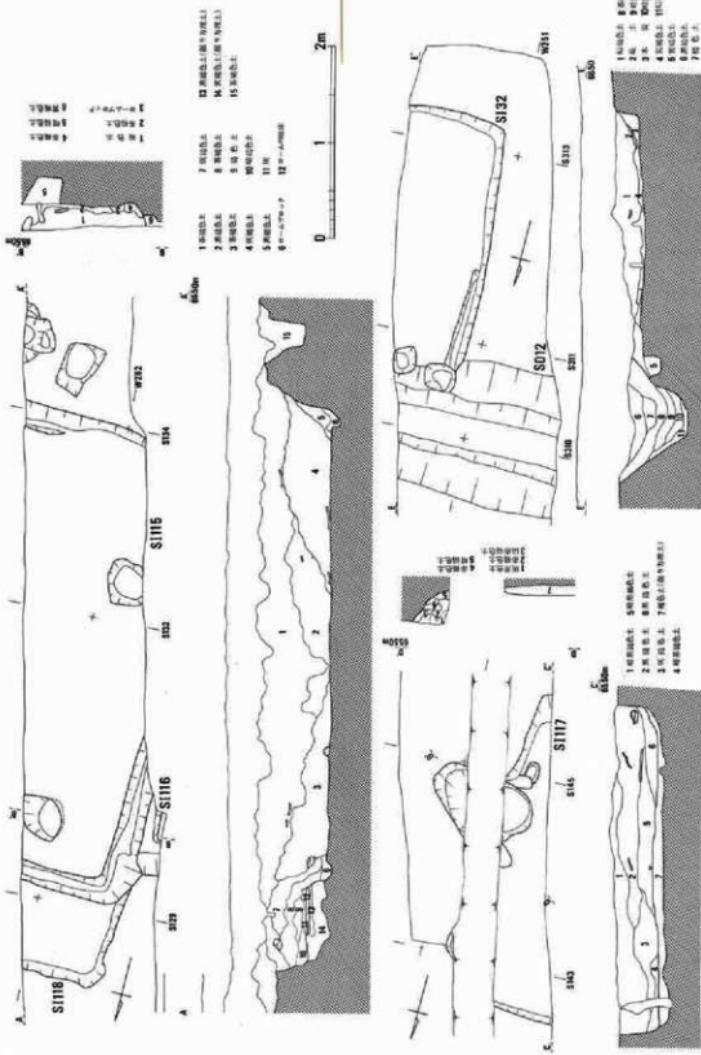
SD 13 溝跡（第5図、第2図版2）

SD 12 溝跡の北に隣接して検出した。SD 12 溝跡とはほぼ平行する東西溝である。調査区の西側では幅約70cm、遺構確認面（ローム層）からの深さ約20cmを測るが、東側では幅約1.2m、遺構確認面からの深さ10~40cmである。従い、幅・深さともにかなりの凹凸があり、新しい時期のものかも知れない。

遺物は、須恵器杯および瓦の小破片が若干出土している。

SD 28 溝跡（第5図、第2図版5・6）

第4回 SI 32°115~118層剖面測定図



中軸線より西 249 m、南 342 m に位置する。軸線に対し N 79° 20' E の方向をとる。遺構確認面（ローム層）で、上部幅員 60 cm、下部 30~40 cm を計り、同面からの深さは 20~30 cm である。横断面は鍋底状を呈し、底面は殆んど水平に作出されている。遺跡内堆積土は黄褐色を示し、ローム粒を混入する。

出土遺物は皆無であった。

SD 29 溝跡（第 5 図、第 2 図版 5・6）

SD 28 溝跡の北側に隣接し、平行して走る東西溝である。遺構確認面（ローム層）での幅員は上部で 60~90 cm、下部で 10~15 cm、東側ほど幅員が広くなる。同面からの深度は 10~40 cm を計る。横断面は摺鉢形を呈す。遺跡内堆積土は 3 区分できる。

出土遺物は、土師器杯および瓦の小破片がある。

SD 30 溝跡（第 5 図、第 3 図版 1）

SD 29 溝跡の北側に隣接し、平行して走る東西溝である。遺構確認面（ローム層）での幅員は 110~130 cm、下部は 10~20 cm、同面からの深度は 30~70 cm を計る。横断面は SD 29 と同様摺鉢形を呈す。

なお、溝内からは、瓦の小破片が 1 点出土している。

SD 31 溝跡（第 5 図、第 3 図版 2）

中軸線より南 297 m、西 255 m の位置で検出した。SD 12 溝跡の約 13 m 北にあたる。昭和 49 年度に実施した第 2 次調査において、既に確認済である。軸線に対し N 83° 15' E の方向をとる。溝の上端の最大幅は約 1.1 m、底面では約 46 cm を測り、遺構確認面（ローム層）からの深さは約 50 cm である。

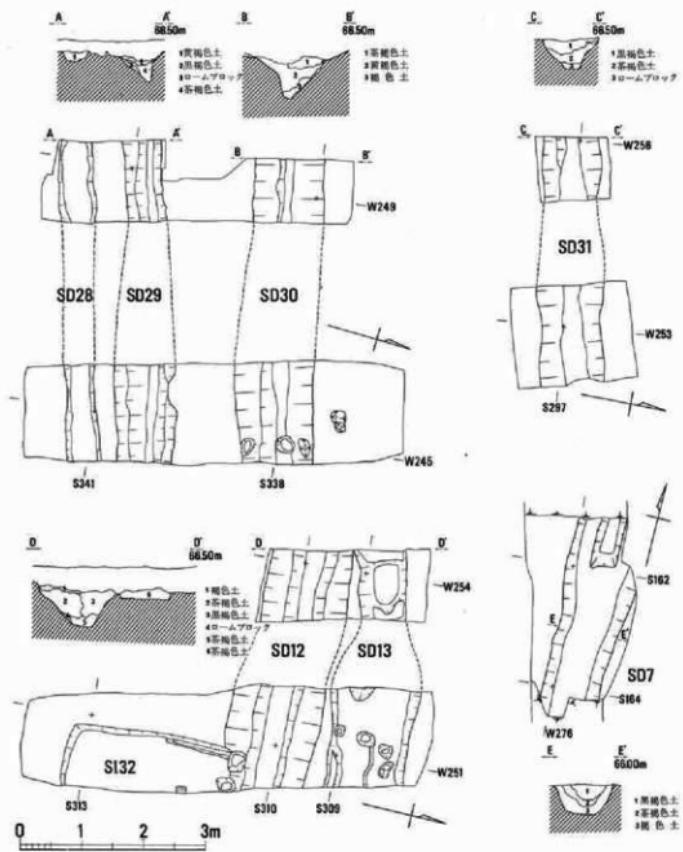
遺物は、いずれも小破片であり、内黒土師器杯・灰釉陶器・瓦などが出土している。

(3) 土 壤

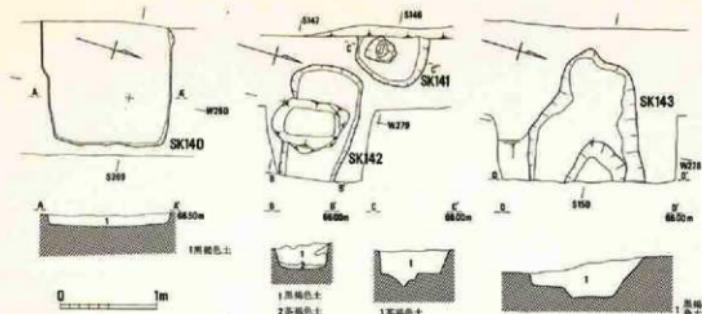
SK 140 土壙（第 6 図、第 3 図版 3）

中軸線より南 269 m、西 260 m に位置する。土壙の西側は、道路外へのびているが、平面形は一辺約 1.2 m のほぼ方形を呈する。遺構確認面からの深さは、約 10 cm の浅い土壙である。土壙内には、ローム粒を多量に含む黒褐色土が入っていた。

遺物は瓦の小破片が若干出土している。



第5図 SD 7・12・13・28-31溝跡実測図構



第6図 SK 140~143土壤実測図

SK 141 土壌（第6図、第3図版4）

中軸線より南146m、西279.7mに位置する。平面形は、一辺約60cmのほぼ隅丸方形を呈し、西側は水道管の掘り山で破壊されている。遺構確認面からの深さは約45cmである。底面には、不整形をした深さ約10cmのピットがある。

土壌内およびピットには、ローム粒を多量に含んだ茶褐色土が入っており、土質は堅くしまり、やや粘性をおびている。

遺物は瓦の破片が1点出土したのみである。

SK 142 土壌（第6図、第3図版5）

中軸線より南146.5m、西279mに位置し、SK 141 土壌の東に隣接して検出した。平面形は70×1.1m以上の隅丸長方形を呈し、東側は車道下にのびており、ほぼ中央を新しい土壌によつて破壊されている。遺構確認面からの深さは約20cmである。

土壌内には、ローム粒を含まないやや粘性をおびた黒褐色土が入っていたが、底面付近には、ロームと黒褐色土の混った褐色土が認められた。

遺物は全く出土しなかった。

SK 143 土壌（第6図、第3図版6）

中軸線より南150m、西278mに位置する。SK 143の東側は車道下にのびている。平面は不整形を呈し、長軸約1.4m以上、横軸は最大で約1.2mを割る。遺構確認面からの深さは約10cm程である。土壌の東側に底面からの深さ約10cm程の掘り込みがあり、二段掘となっている。

土壌内には、ロームブロックを含んだ黒褐色土が入っている。

遺物は瓦および須恵器蓋の破片が出土している。

VI. 出 土 遺 物

S I 1 1 5 住居跡

(1) 土器

杯(第7図3、第4図版)

体部は、底部よりやや内彎ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反する。ロクロを使用せず、口縁部の外面を横ナデし、体部は指頭による調整後、かるい横ナデが施されている。底部はヘラケズリされているが、ヘラケズリ以前に静止状態での糸切りと思われる痕跡が認められるが断定しえない。内面は全体に横ナデされている。

なお、底部に墨書きがみられるが、判読できない。

(2) 須恵器

杯(第7図1・2、第4図版)

いずれも内外面ともに右回転のロクロによる調整が施され、底部には回転糸切り痕がそのまま残る。胎土は、大粒の石英を多量に含み、白い纖維状の物質は全く含まれていない。

1は、体部がやや内彎しながら立ち上がり、口縁部は強く外反する。体部には、右下りに粘土紐巻上げもしくは輪積み痕跡が残る。色調は灰青色を呈す。

2は、1に比べやや厚手のもので、体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直上する。色調は全体に黄褐色を呈すが、口縁部は灰色を帯びており、焼成不良のものである。

(3) 瓦

縦(軒丸)瓦(第7図4、第5図版)

破片のため箇数は不明であるが、単弁蓮花文瓦である。中房に1+4の蓮子を配し、外区は素文である。瓦当と男瓦の接合は、男瓦の内側に瓦当を置き、接合部に粘土を補強し、ヘラケズリを施して周縁を仕上げている。従い、範型は内区のみ使用している。また、接合部裏面は入念なナデが施されている。

字(軒平)瓦(第8図、第5図版)

瓦当面は、女(平)瓦の凸面の狭端に厚さ約2~3cmの粘土をたして作られている。一部欠失しているが、内区文様はヘラによる刻線で鉤曲文を配している。鉤曲文は一部不連続であり、刻線は、ヘラを左右交互に入れているため、断面は「V」字状を呈す。頭は段頭で、凸面に縄目がみられ、底部はナデを施して縄目を消している。女(平)瓦は、幅約5~6cmの粘土紐の継ぎ目が6本観察され、おそらく粘土紐巻上げによる桶巻造りによったものと考えられる。

男(丸)瓦(第7図6)

凹面の布目圧痕下に粘土紐の繼ぎ目が残る。凸面は丁寧にヘラ状工具によるナデが施されている。また、凸面に「尋」の押印がある。

女(平)瓦(第7図5、第9図1・2、第10図1・2、第5図版)

7-5は、凸面に繩の叩き目、凹面に布目圧痕を残す。凹面にヘラ書きによる文字がみられるが、大部分は欠失しているため判読できない。

9-1は、凸面に「孝」の叩き目を有する。文字ともみられるが判然としない。凹面には、布目圧痕が残り、側端および狭端にヘラケズリが認められる。

9-2は、凸面に斜格子の叩き目を有する。また、「莊」の押型が残る。凸面には、布目圧痕下に糸切り痕が認められる。

10-1は、凸面全体に横位のナデが施されており、叩き目の種類は不明である。凹面には、布目圧痕が残っているが、部分的に縦位のかかるいナデがみられる。また、凹面に「匱」の押印がみられる。

10-2は、凸面に斜格子の叩き目が残り、部分的に叩き目の上に布目圧痕が認められる。凹面には、布目圧痕下に糸切り痕が観察される。また、凹面に「匱」のヘラ書き文字がみられる。

S I 1 1 7 住居跡

(1) 土師器

杯(第11図1、第4図版)

色調は赤褐色を呈す。胎土には粗砂粒を若干含有する完形の杯である。体部はゆるく内彫しながら立ち上がり、口縁部は強く外反する。体部外面は、左→右へ指頭による調整が施され、口縁部外面から内面全体には横ナデによる調整が施されている。また、内面には左上りの指抜きの痕跡が認められる。底部は手持ちヘラケズリが施されている。体部および底部に「花」の墨書きがみられる。

(2) 須恵器

杯(第11図2、第4図版)

先述の土師器杯と重なった状態で、堆積土中より出土した完形の杯である。体部はゆるく内彫しながら立ち上がり、口縁部で若干外反する。口縁部および体部の内外面には、粘土紐巻上げないしは輪積みと考えられる痕跡が認められる。ロクロは右回転である。底部には回転糸切り痕が残り、再調整はない。また、先述した土師器杯と同様に「花」の墨書きが底部にみられる。なお、文字ではないが、器面の一部に墨痕が散っている。

(3) 瓦

女(平)瓦(第11図3、第12図、第4図版)

11-3は、厚さ約1.9cmで、凹面に織目のやや細かい布目圧痕をとどめ、「王」の文字がヘラ書きされている。側面および側端は、狭端から広端方向にヘラケズリによる整形が施されている。

12は、5層上面に凹面を下にした状態で検出された完形の平瓦である。約2cmの一様の厚みを有す。凹面には幅約3~4cmの粘土紐の継ぎ目痕があり、その叩き方向は、広端から狭端に向って円弧を描く。ただし、1~2ヶの叩き目は、軌跡をはずれるようである。凸面の狭端および左側端付近に「父」の押印が2ヶ所みられる。狭端付近の押印は叩き目痕を明瞭に切っている。端面および端縁の整形は、広・狭端で3面、左右側端で2面のヘラケズリが施されている。

SD 3 1 溝跡

(1) 瓦

男(丸)瓦(第11図4)

凸面に縦位のナデ、凹面に布目圧痕が残る。凸面には「二」のヘラ書き文字がみられる。

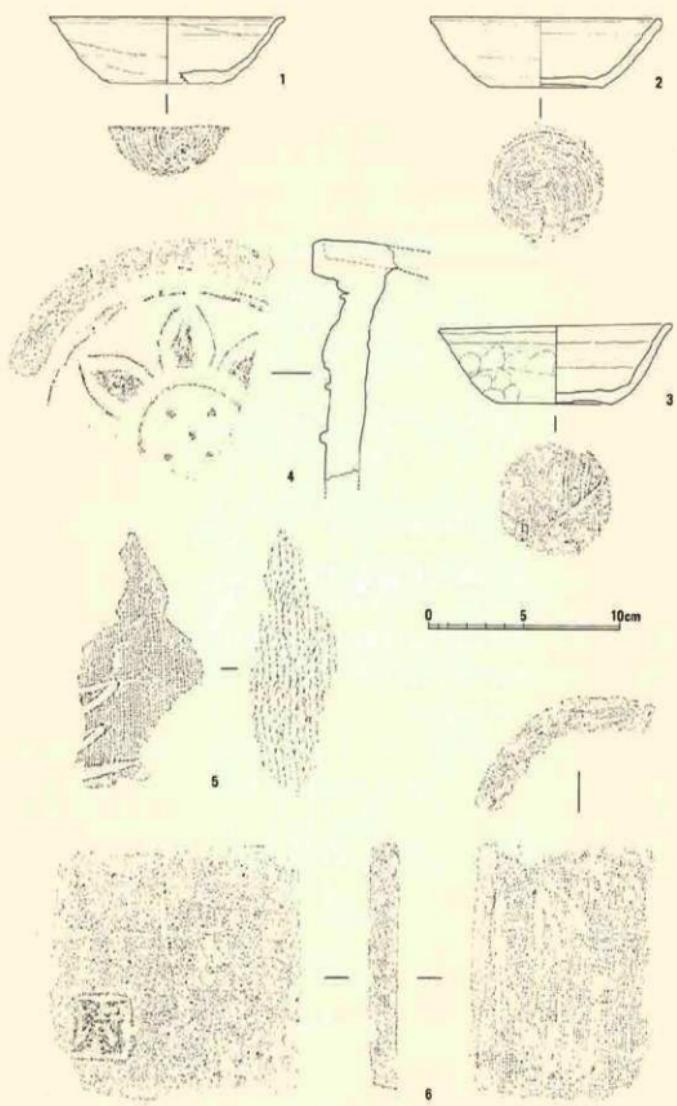
VII. 小結

第23次調査における成果を要約すると以下の通りである。

1. 都道17号線下、西側の遺構の保存状態を把握することができた。ここでは上下水道・ガス管・電気ケーブル等の埋設物により、一部攪乱をうけているものの、全体としてよく保存していることが判明した。
2. 本調査で東西および南北にはしる溝が7条発見されているが、これらの溝は奈良・平安時代に於ける武藏国分寺周辺の地割を復元する上で重要な手筋である。

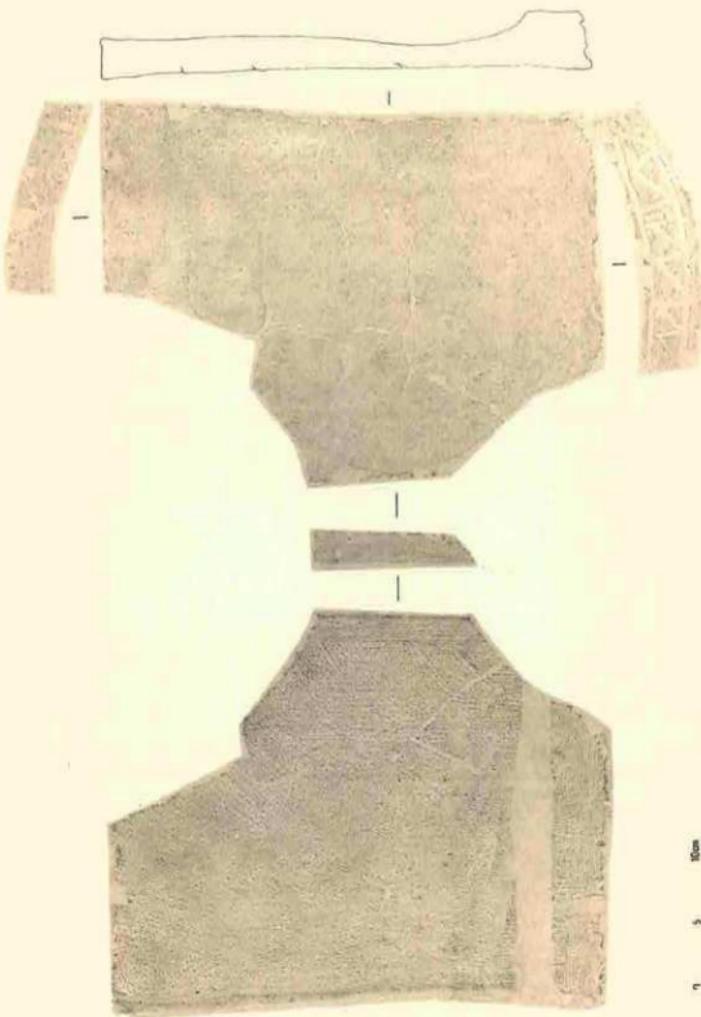
また、SI 32住居跡とSD 12溝跡の切り合いは、SD 12の年代を知る上で重要である。SI 32住居跡からは、須恵器杯の底部に回転糸切り痕をそのまま残す破片が出土しており、このSI 32を切って、SD 12が作られている。このことは、SD 12が国分寺創建時まで遡り得ず、平安時代になってからのものであることが判る。

従つて、今回発見された7条の溝跡についても、各々時間差を考慮する余地があり、この点で、SI 32とSD 12の重複関係が把握できたことは貴重な成果である。



第7図 SI 115 住居跡出土遺物

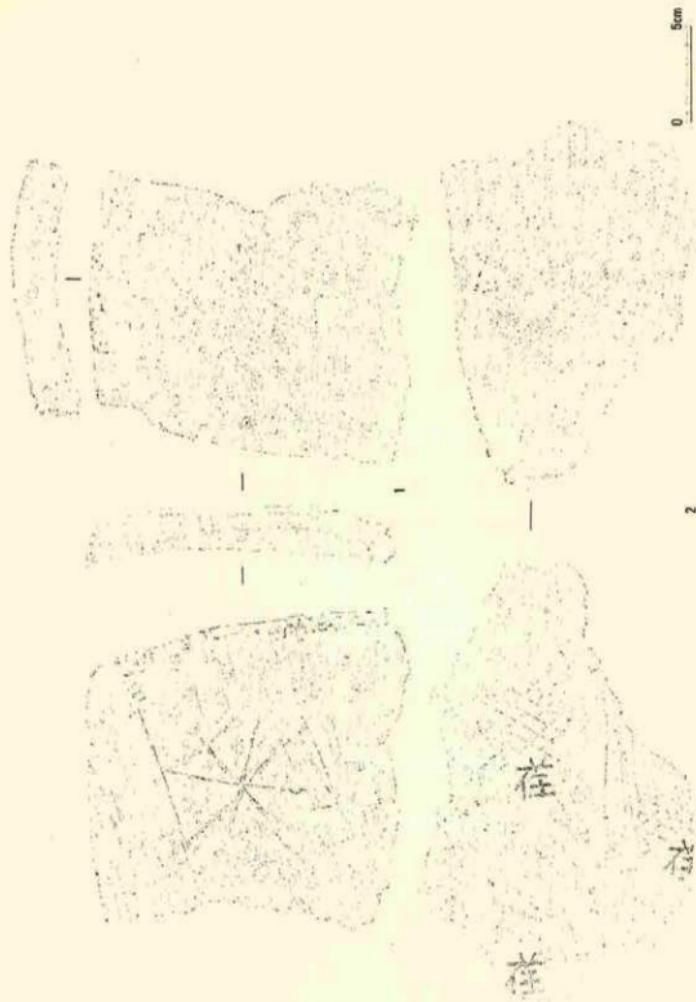
第8圖 S1115 住居跡出土遺物



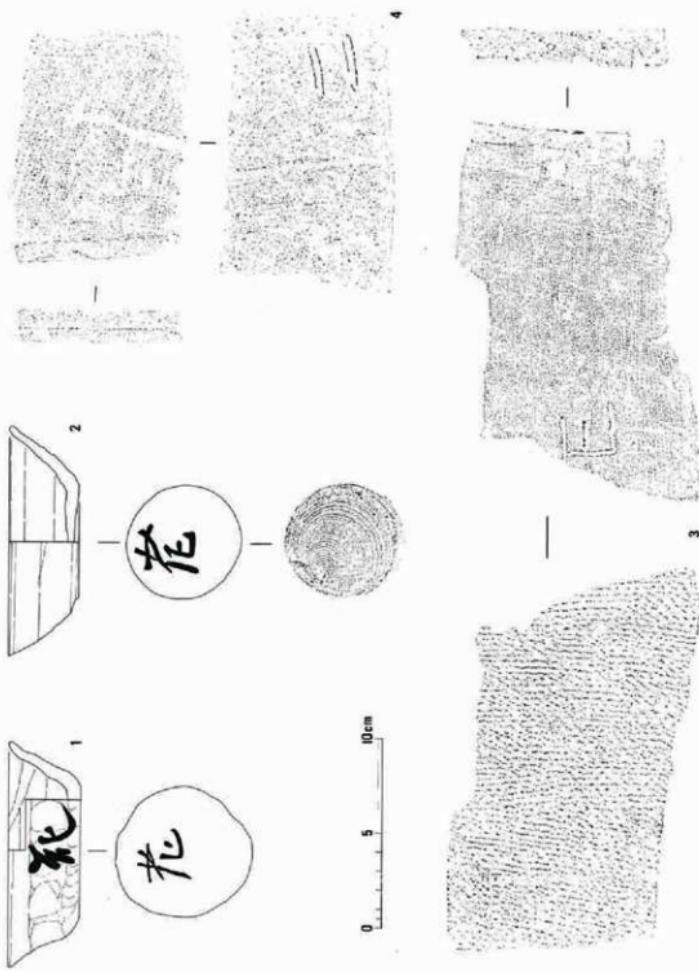
第10图 S1115住居跡出土遺物



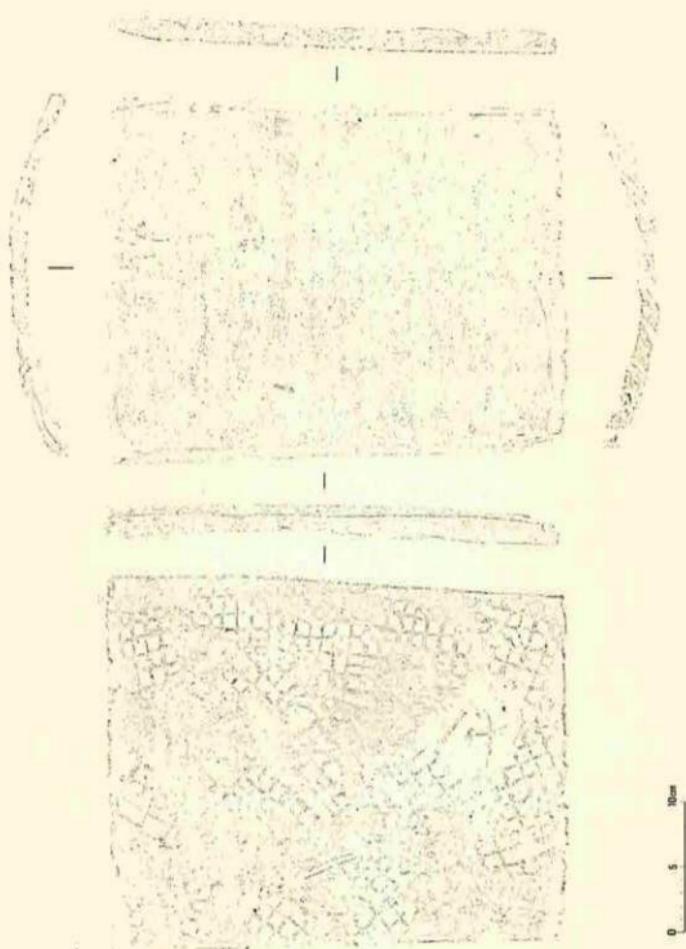
第9圖 S1115 住居跡出土遺物



第11図 S1117 住居跡・SD31 濃跡出土遺物



第12图 S1117 住居地出土遗物





1. 調査風景



2. 調査風景(夜間)



3. SI132住居跡



4. SI117住居跡



5. SI115住居跡



6. SI115～
118住居跡



1. SD7溝跡



2. SD13溝跡



3. SD12溝跡



4. SD12溝跡



5. SD28・29溝跡



6. SD28・29溝跡



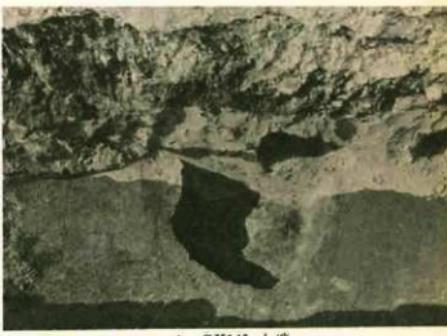
1. SD30溝跡



2. SD31溝跡



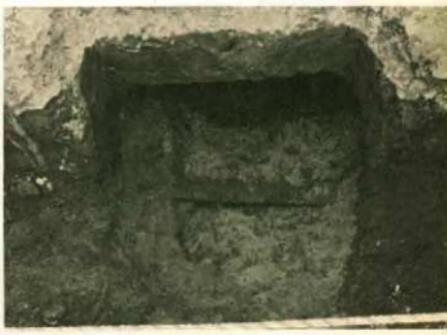
3. SK140 土壠



4. SK141 土壠



5. SK142 土壠



6. SK143 土壠



11-1



7-3



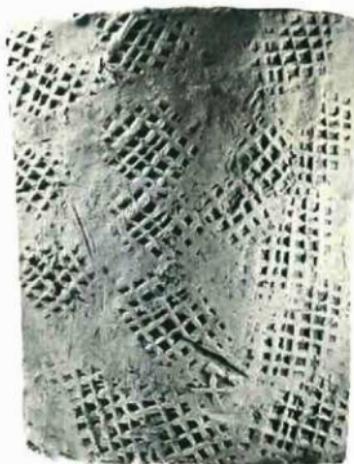
11-2



7-1



12





7-4



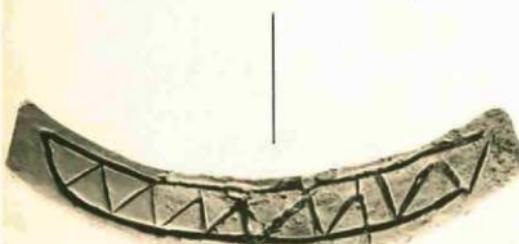
7-6



8



9-2



10-1



10-2

- 第1図 調査地区の位置
第2図 基本層序 (1/20)
第3図 第23次調査遺構配置図
第4図 S I 32・115~118 住居跡実測図
第5図 S D 7・12・13・28~31 溝跡実測図
第6図 S K 140~143 土壌実測図
第7図 S I 115 住居跡出土遺物
第8図 S I 115 住居跡出土遺物
第9図 S I 115 住居跡出土遺物
第10図 S I 115 住居跡出土遺物
第11図 S I 117 住居跡・S D 31 溝跡出土遺物
第12図 S I 117 住居跡出土遺物

- 第1図版 遺構
第2図版 遺構
第3図版 遺構
第4図版 出土遺物
第5図版 出土遺物

都道17号線道路補修および歩道設置 工事に伴なう発掘調査報告

1978年3月31日

発行 東京都北多摩北部建設事務所
編集 武藏国分寺遺跡調査会
印刷 晓印刷株式会社

令和4年(2022)8月25日 デジタル版作成
図10・9は原本から順序が逆になっている